

患者立脚型アンケートを用いた内視鏡下手術患者のアウトカムの検討

outcome evaluation

金子 剛士¹、高野 裕一¹、稲波 弘彦²、古閑 比佐志¹、近藤 幹大¹、島袋 孝尚¹、横須賀 純一¹、堀内 多恵³

¹岩井整形外科内科病院、²稲波脊椎・関節病院、³東京大学大学院

【目的】我が国の急速な高齢化に伴い、脊椎疾患に伴う手術は今後更に増加が見込まれている。当院は内視鏡下の脊椎手術を行っており、2012年より患者立脚型のアンケートを実施している。手術手技の事後確認は動画で可能となっているが、術後の身体機能の改善や精神面の状態などは定量化が困難であった。本研究では患者立脚型のアンケートの結果を用いて、当院の内視鏡下手術患者の術前、術後1年目の身体的機能と精神面の変化を定量化し、その関連性を明らかにした。【方法】2012年4月から2015年5月に当院にて手術を施行した患者より取得したアンケート結果のうち、1年後の結果も取得できた826例を対象とした。手術は全て内視鏡下で施行されており、得られたデータの内訳は、腰痛椎間板ヘルニア摘出術 (MED)が509件、腰椎椎弓切除術 (MEL)が317件であった。Short-Form36 (SF-36)は下位尺度として心の健康、身体の痛み、身体機能および日常生活機能を取得し、術前と術後1年後のデータを得た。年齢は中央値に応じ2群に分割した。統計解析は2群間の比較については wilcoxon/kruskal-wallis 検定を用いた。【成績】各手術方法とも身体機能の改善は認められた。最も改善度が高かったのはMEDの日常活動機能であった(23.6点)。心の健康については、MEDが12.6点の改善であったものの、MELは8.1点であった。さらに年齢別においては、MEDの中央値である51歳以上の手術施行患者は術後の身体的機能の改善度合いの傾向にあった。特にMELにおいては精神面、身体的機能とも有意に改善の度合いが低かった。性別については女性において術後の身体機能の改善が優位に低かった。【結論】以上の結果より、MELはMEDに比べ術後の心の健康の改善が低い傾向にあった。手術施行時年齢によって身体的機能の改善度合いに違いがあることが示唆され、さらにMEL手術においては高齢者には術後の精神面のケアが必要であることが示唆された。